

事後評価報告書(日-アメリカ研究交流)

1. 研究課題名:「社会ロボットにおける文化的モデルに関する研究ー日本とアメリカにおけるロボットの利用者の比較に関する研究」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:独立行政法人産業技術総合研究所ヒューマンライフテクノロジー研究部門
上級主任研究員 柴田 崇徳

2-2. 相手側研究代表者:インディアナ州立大学 情報・計算学部 助教 Selma Šabanovic

3. 総合評価:(B)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

アザラシ型ロボットを使用して、日本とアメリカとで、ロボットセラピーの評価実験を行い、アメリカにおいては、動物飼育経験が多い人が多く受容性が高いことが分かった。また、日本発のアザラシ型ロボット「パロ」が米国で導入されるための条件が整えられた。

日本側のチームは、パロに関して経験豊かであるが、ユーザ側であるセラピーの専門家が、チームのメンバーとして入っていれば、より効率的に研究が進められたと思われる。客観的データの取得という意味では問題が生じるかもしれないが、関与の仕方を工夫することで問題は回避できたのではないかと。また、評価結果が定性的で、日本とアメリカで共通的な特性や差異のある特性についての、定量的な結果が不明であるのは残念である。

(2)交流成果の評価について

これまでと異なる視点からの評価や治験データの収集は、今後のパロの開発に対して有効であろう。特に、退役軍人病院での電子看護・介護記録システムにパロのメニューを追加し、一部の施設で臨床データの記録が始まったことは、今後のパロの普及に大いに貢献するであろう。

アメリカ側の研究者が東北 3 県を訪問し、富山のパロの製造工房も訪問して、ディスカッションを行った点は評価できる。その他、国際会議等でのディスカッションは見受けられるが、ワークショップの場であるので、アメリカ側の研究者と互いの評価結果をもとに真にディスカッションできたとは言いがたく、交流は限定的であったようである。研究者の長期間交流や派遣等、人材育成に繋げる活動が望まれる。

共著の論文が 1 件のみしかないのは残念であった。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

5 件論文が上がっているが、そのうち 3 件は国際会議(うち 2 件はワークショップ)であり、論文としては認めがたい。また、アザラシ型ロボット「パロ」によるセラピーについての協力のアクティビティ自体の意義は強く認められるが、この活動は、本事業の目的と若干異なっているように感じられる。